公開講座
「東日本大震災緊急レポートから―今、必要な発達支援を考える」

西村優紀美（富山大学保健管理センター）

Public lecture
"On an urgent report on the Great East Japan Earthquake
：Think about current required support for people with developmental disorders"

Yukimi Nishimura
：Center for Health Care and Human Sciences University of Toyama

平成24年度富山大学公開講座では、東日本大震災で被災された方々、そして、震災直後から緊急支援に当たった方々を講師として招き、「東日本大震災緊急レポートから－今、必要な発達支援を考える」をテーマに開催した。ここでは、二人の方の講話を紹介する。一人は石巻市雄勝町在住の徳水利枝氏で、もう一人は石巻市の中学校で教員として勤務していた佐藤かつら氏である。共に、ご家族を津波の被害で亡くされている。

筆者は一昨年の冬に、宮城県ここねっと発達支援センター理事長である佐藤秀明氏から、「砺波のチューリップを大川小学校跡地に咲かせたい」という依頼を受けた。佐藤氏は、「発達障害児・者支援に大切なのは、彼らの視点で彼らが何をどのように見て、何を感じているのかを知ることであり、彼らが主人公の物語を読み進めるように彼らの人生を描いていこうとする態度である。」と言う。支援すべきことは彼らが教えてくれるのであって、決して支援者側の都合で決められるものではないのだ。このような支援者の態度は、発達障害児・者支援だけではなく、震災で生活基盤を失い家族を失い、大きな喪失体験の中にいる子どもたちに寄り添う態度にもつながると佐藤氏は言う。

被災地に届けたチューリップの球根は500個。こんな寒い時期に植えて育つのだろうかと不安だった。津波の犠牲に遭った我が子を偲びつつ、凍える手で一つひとつの球根を土の中に植えていたであろう保護者の気持ちを思うと、無事に育ってくれることを祈らずにはいられなかった。

震災から1年が過ぎた昨年の5月、その写真は筆者の元に届いた。石巻市立大川小学校の70名のこどもたちが津波の犠牲になった三角地帯（新北上大橋のたもと）に砺波のチューリップは花を咲かせた。まるで身を寄せ合う親子のような二つのチューリップ（図1）。公開講座では、通訳者になりたいという夢を持っていた佐藤みずほさん（当時大川小学校6年生）の母親である佐藤かつら氏から貴重な話を伺った。「山に逃げよう！と訴えていた子どもがいました。地震発生から51分間の真実を知り、二度とこのような悲劇が起きないことが、多くの犠牲者の命を輝かせることになるのです。」我が子の命を輝かせた

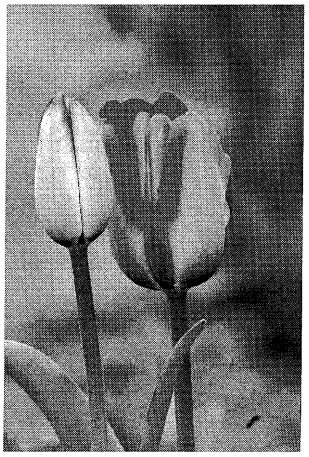

図1：被災地に咲いたチューリップ

いと願う母親の気持ちは、今でもみずほさんに寄り添っている。

そして、昨年８月、再び石巻市立大川小学校を訪問し、ご子息を亡くされたという男性に案内していただいた。「体育館の後ろにあるなだらかな裏山に逃げれば、みんな助かったのです。」そう説明を受けながら案内された裏山は、運動場からわずか５分。６年生なら走れば２分とかからずに駆け上がることができるだろう。低学年でも10分以内でたどり着く距離だ。普段から椎茸栽培に使っていた場所で、人が通る山道がついていた。

「ここまで上れば津波は来なかった。」と説明された場所の杉の木には、津波の高さを示す印が付けられていた。地元の人が確認した高さだという。運動場からは、あっという間にたどり着ける場所である。

男性の自家用車には、野球少年だったご子息の写真が乗っている。はじける笑顔が悲しみをいっそう深くする。一瞬たりとも頭から離れることのない我が子。その命を輝かせたいと願うご家族。地震発生後の51分間の真実を知りたい・・・証言してくれた児童が語った言葉をそのまま調査資料に盛り込んで欲しい・・・今後、同じような悲劇が二度と起きないように、今回の大川小学校の事実を検証し、緊急マニュアルを作って欲しい・・・当たり前の要望が、まだ一歩も進んではいない。案内してくれた男性は、「津波や地震の専門家を第三者委員会のメンバーにして、未曾有の津波だったという結論を出したとしても、我々が問題にしているところはそこではないのです。未曾有の災害が起きたときに、学校としてとるべき緊急マニュアルを徹底させるために、今回の大川小学校の悲劇から学ぶことがたくさんあるはずです。その一歩が地震発生後の51分の真実を検証することなんです。今は苦しいけど、丁寧に向き合っていくしかないと思っています。我が子に恥ずかしくないように、真実を追究していく姿勢をとり続けたい・・」と言う。昨年春、砺波市のチューリップが咲いた三角地帯。子どもたちは裏山と逆方向にある、この三角地帯に誘導され、津波にのまれてしまった。夏には三角地帯にひまわりが咲いていた。空を見上げ、凛と立つひまわりの花だった。

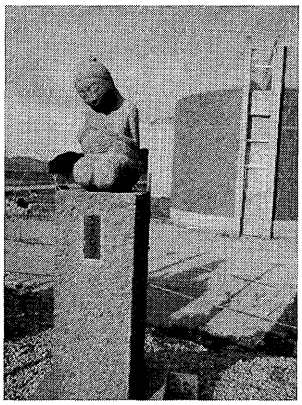

図２：大川小学校跡地に建つ「子まもり」像

その後、昨年10月初旬、筆者は石巻市雄勝町を訪れた。公開講座で講話をお願いした徳水利枝氏に、雄勝町を案内していただいたのである。徳水氏は、次のように語る。

「震災から１～２カ月は、水もない、寝る所もなく自分たちがどうやって生きるかだけを考えて過ごしました。その間に、被災した雄勝に残って漁業を復活させようとする人や、伝統工芸である硯の生産をもう一度やろうとする人たちがいることを知って、私たちはわりと早いうちから、雄勝の復興にかかわろうと気持ちを前に向けました。私がつらかったのはその後です。気持ちが前に向くということは、一瞬でも後ろを振り向かないということです。前を向くことと、後ろを振り向かないで過ごしまうという二つの気持ちが自分の中にあって、すごく苦しかったのです。」

雄勝町は本当にすべて建物がなくなっていた。そんな風景の中で、我々は復興への希望に出会った。それは「雄勝硯」である。硯職人の遠藤弘行氏は、震災後まもなく仕事を再開した。すべてを流されてしまった雄勝町に「エンドーすずり館」の旗を立て、仕事を再開したのだ。遠藤氏は父親の代からの硯職人である。雄勝石を手で磨き、絵を彫り、すべて手作業で仕上げていく。手のひらサイズの硯から大きな昇り龍を施した立派な装飾硯、赤ちゃんの足形を硯にしたオリジナル作品もある。ある著名な書道家が雄勝硯の質の良さに気づき、特別に注文したという話を聞くことができ

た。徳水氏はかつて実家の在った場所に花を植え、「OGATSU 花物語」というプロジェクトを続けている。今後、ガーデンハウスを建てる予定があるという。前を向くということは、過去から続く現在（いま）を大切に繋いでいくということ。厳しい現実をいきる方々から大切なメッセージを受けとることができたことに感謝したい。

Neimeyer（1998）は、喪失体験をした人が特定の心理状態を段階的に経験していくという理論を裏付ける証拠はなく、最終的に回復状態に達するのではなく、大切な人を喪失したことや故人のいない世界の意味を再構成していくことが悲嘆過程であるという。意味の再構成とは、故人との心理的絆を作り直し、その思い出を語り、一貫性のある人生の物語を書き直すということである。悲嘆の達成とは、故人への強い思いがなくなるということではなく、故人への象徴的絆が持続することにより、大切な人がいなくなった世界を生きていく上で、その絆が重要なものになる可能性があると認識するようになることとしている。

我々にできることは非常に少なく、この事実にどう向き合えば良いのか分からず途方に暮れるばかりである。しかし、被災された方々の話に耳を傾けることはできる。思い出を語り、意味の再構成という心の作業に、寄り添うことならできるかもしれない。想像を超える真実に圧倒されながらも、ただ聴くしかできない、その無力感を感じつつ、ここに講演記録を記す。

「震災による喪失体験と地域支援」

徳水　利枝（塾講師）

Experience of loss in the Great East Japan Earthquake and local support

Rie Tokumizu (Cram school lecturer)

昨年 10 月、西村先生を含めて、かなりの人数の方が石巻市雄勝町に来てくださり、その後で、西村先生からこちらで話をしてみないかというお誘いを受けました。実は、私の息子が富山大学に通っております。息子自身のことも、震災後、大学関係者の方から大変心配していただきました。私たちも息子を通じて多くの方から支援をいただきましたので、ぜひこちらに来て皆さんに一言お礼を申し上げたいという気持ちで、今回のことをお引き受けしました。話は大変つたないと思いますが、その辺はどうぞご勘弁ください。また、10 月に大学を通じてチューリップの球根を頂きました。私たちの被災地でそれがとてもきれいに咲いたので、そのこともぜひご報告したいと思います。

３月 11 日のこと

雄勝町は、津波で多くの児童が亡くなった大川小学校から三角地帯という所を U 字型に山を登って、山を下りた所にあります。地形的にも、山を一つ越して大川と雄勝がありますが、私はその雄勝町で 50 年のうちの約 40 年間を過ごしました。自分が子どものときと、自分が子育てをする間はあの町で過ごしたことになります。

震災当日は、私は大川小学校からさらに 7km ほど北上川の上の方で、運転中に地震に遭いました。雄勝に母を残していますし、主人が雄勝小学校に勤めているので、津波のことなど全く考えませんでした。また、雄勝小学校はとても古い学校なので、この揺れでは学校は壊れただろうという心配だけで雄勝町に戻ろうと思い、まさか津波が来るとも思わずに、大川小学校の子どもたちが目指したといわれる三角地帯を車で通り過ぎました。ですから、私は、後からいろいろな防災関係の方たちが言うところの一番悪い被災者です。自分が津波でどうにかなるとも思わず、自分の身は安全だろうと思って何の心配もせずにとにかく車を運転してしまったという、ちょっと苦い経験をしています。

山の上まで行ったところで、トンネルをくぐると雄勝に行けるのですが、あの日はそのトンネルをくぐらなかったのです。なぜ自分はトンネルの前で止まったのか、1 年くらいたってから自分の

行動を振り返ることがありましたが、その日のことをよく覚えていないのです。そのときには、津波が来るなどとはきっと考えなかったのでしょう。しばらくして、トンネルを過ぎて雄勝の方に行くと、どうもみんなが逃げてきているのです。これは車で行けないなと思って歩いて下りていくと、坂を下りた所はとにかくすべてのものが倒れていました。トラックもひっくり返っていて、ずっとクラクションを鳴らしていました。まるでSF映画を見るような感じでそれを見ながら、何となく頭の中では「母は大丈夫かな」「学校は倒れたかな」「むしろ主人の方が駄目だったかな」と思いつつ、その日は一晩トンネルのそばで過ごしました。

翌日、私が過ごした山のもう少し上の方で主人たちと会うことができましたが、大丈夫だと思った母の方が行方不明でした。ご近所の方から「自分が振り返ったときには、もう波で見えなくなっていた」という一言を聞いて、やはり駄目だったと判断しました。その後は、とにかく主人の体調が悪かったことと、娘が高校で避難していたので、町を出て自分たちが生きる方向を選びました。それが震災１～３日目ぐらいです。

夢中で過ごした１～２カ月

それから１～２カ月は、水もない、寝る所もないという、とにかくないないづくしだったので、本当に自分たちがどうやって生きるかだけを考えて過ごしました。携帯電話も４～５日は全く通じなかったのですが、そのうちやっと通じるようになると、たくさんの人が心配して連絡してきてくださいました。ガソリンのない所まで支援物資を運んでいただいたりして自分たちの身が何とかなるようになってからは、今度は出てしまった雄勝に自分たちが何か支援しなければならないと思い、とにかく夢中で1カ月、2カ月を過ごしました。その間に、被災した雄勝に残って漁業を復活させようとする人や、伝統工芸である硯の生産をもう一度やろうとする人たちがいることを知って、私たちは割と早いうちから、雄勝の復興にかかわろうと気持ちを前に向けました。

私がつらかったのはその後です。気持ちが前に向くということは、一瞬でも後ろを振り向かないということです。前を向くことと後ろを振り向かないで過ごしまうという二つの気持ちが自分の中にあって、何かすごく苦しかったのです。6カ月ほど過ぎてからがとてもつらくて、今も言葉が詰まってしまいますが、これが車の運転中などに来てしまうものですから、これは駄目だと思い、どうしようかと随分悩みました。

悩む中で、自分は何がつらいのかをもう一回見つめようと思ったのです。実は、佐藤先生が仙台で行われていたコミュニケーション・スキル・コーディネーターという講座を私も４～５年前から受けていて、いろいろなキーワードを学習していました。そこで確か「切り口」という言葉があったことを思い出し、自分をいったん置いて、なぜ苦しいのか、何がつらいのかを見つめてみようと6カ月ぐらいたったときに思い、自分と向き合ってみたのです。

いったん冷静になって自分のつらさを見ようとしたときに気付いたことは、何回も町に足を運んで、それを見て前向きになることと、前にあったものをどんどん捨てていくような感覚になることがきついということです。

もう一つは、当時は津波の様子がテレビで流れましたし、被災した経験も流れましたし、「こうやって助けた」といった美談も流れましたが、それと自分が実際に見たものとのギャップが結構あるのです。また、美談を聞くたびに自分の中にわき上がってくるのが、私はなぜあのとき母を助けなかったのだろう、あの時間帯であれば坂を下りて母を車に乗せて逃げられたのではないかという思いです。それからもう１点は、多くの有名人が被災地に本当にたくさん来ました。「元気を与えに来ました」とやって来て、観客の方を見ると今度は「被災者の人たちは笑顔になりました」と言われます。でも、自分はそうはならないし、それで今元気になりたいとも思わないのです。

「絆」や「元気」「前向き」といった言葉に当てはまらない自分がいて、それが苦しさの原因ではないかと自分なりに分析して、流せるものは流していかないとやっていけないと思い、そこはそのように対応しました。しかし、それであっても言葉で「被災者の方々は」というふうに言われると、それが非常につらいのです。言葉でうまく言い表せないのですが、自分は「被災者の方々」には入っているのに、「被災者の方々はこうだった」には入らない。これをどうしようかという思いをずっと抱えながら過ごしました。

そんな中で思ったのが、佐藤さんの講座で勉強していた「切り口」というものを自分の一つの武器にしようということです。この人たちから見たら被災地はこうで、被災者はこうだけれど、自分は別の方から見えているのだ、いろいろな見え方があってよしとしよう。そして、とにかく一番先に感じた被災した雄勝とつながっていこう。この二つは自分の中で決めてやっていこうと思いました。

更地に花を植えよう

そこで始めたのが、更地になった雄勝の土地を花で飾ろうということです。7月ごろは、何も手を付けていないので、がれきにぼうぼうと雑草が生えている状態でした。残ったヒマワリは、多分、被災前に種がこぼれて咲いたものです。写真の後ろの方にあるのは、ぼろぼろになった市営アパートで、今でも残っていますが、その前もがれきと草だけになっていました。自分は硯という伝統工芸の職人ではないのでそれを作ることもできないし、海の仕事もできない、では、何で雄勝とつながるかと考えたとき、自分は土地でつながっていこうと考えました。

そのころから、ボランティア以外の人も被災地に来るようになりました。ボランティア以外で来る人たちは、被災状況が見たいのです。ぼろぼろのアパートや、大きな津波によってバスが屋上に乗った公民館がありますが、そういう被災した状況の写真をどんどん撮っていて、それが非常に頭にくるのです。被災地にお金を落とすことも支援だからといって、皆さんが来ることを歓迎しているところもあります。もちろんそれも一理ありますが、やはりひどい状況だけを見ていくことには内心頭にきました。しかし、支援してもらっているので、その思いは出せません。その葛藤から出てきたストレスを、先ほどの佐藤先生の言葉を借りて言うならマネジメントするために、がれきだけではない所を造ろうと思って花を植え始めました。

自分一人で鍬を持って、「何をやっているのだ」と言われながらやっていたところに、たまたま千葉大の園芸学科の方々がボランティアに来ました。花を植える場所を探しているということで、どうぞここをと言うと、自分一人でやっていたところに初めて千葉大の方々が手を貸してくださいました。「千葉大が来てこういうふうにしたのだけど」と富山大に通っている息子に話したところ、先生方の紹介で富山からチューリップの球根が500個送られてきました。その球根を、私と娘、そして雄勝にボランティアに入っていた方々で植えようとしたのですが、500個などとても植えられません。そこで千葉大にお願いしたところ、園芸学科の方たちがもう一度来てくれて、畝を作り、チューリップの球根を500個植えてくれました。ちょうどそこは母が住んでいて、私が学習塾を開いていた所でした。そこが更地になったので、道路沿いに球根を植えたのです。

図3：OGATU花物語

年が明けてから、そこに残っていた家の基礎をすべて撤去しました。それまでは広い土地には手を付けられなかったのですが、家の基礎を全部取ると本当の更地になり、これがますます悲しく感じられました。やはり更地を更地のままにしておくのは嫌だから、そこにも花を植えたいと思い、土地がぼこぼこしていたので耕耘機を買おうかと主人と二人で考えました。しかし、耕耘機を買うには何十万円とかかるし、耕耘機を買ってもあの土地に花は咲かないだろうなどといろいろ考えていたとき、たまたま河北新報という東北地方の新聞に、石巻で花を植える活動をしているというちょっとした広告が載りました。その辺が後先考えないところなのですが、これはいいかもしれないと思って、「雄勝に自分の土地がこれくらいありますが、どうでしょうか」と電話をしてみました。

すると係の人が見に来てくれたのですが、その人は「南三陸や気仙沼など、いろいろ回っているけれど、ここはひどい。確かに南三陸も気仙沼もここと同じくらい大変な状況ですが、少し高台に行くと人の声がするし、仮設があって人の気配がする。でも、雄勝は人っ子一人いない」と言われたのです。雄勝町は湾が入り組んでいて山もあるので、仮設住宅がほとんど建てられません。山をずっと越えて、大川もさらに過ぎた所に大きな仮設住宅を建てて、4300人の住民のうち3300人くらいがそちらに移りました。従って、1000人しか残っていないのです。平日は本当に人が一人もいません。

雄勝を見に来られた係の人は、「ここはやらなければいけない。これだけ人がいなくて寂しい所をこのままにしておけない」とおっしゃって、「OGATSU花物語」というプロジェクトを立ち上げてくださいました。実行委員長は私ですが、委員一人の実行委員会です。

それでも支援してくださる方が出てきて、その土地にトラック20台分ほどの土を入れて、堆肥も6台分くらい目いっぱい入れてくださって、そこに花壇を造る作業が始まりました。

トラックで土を入れたのが2012年2月でした。土が雪で埋もれている状態だったので、オンザロードという石巻市に被災後からずっと入っているボランティア団体が、とにかく土をまいて平らにしないと花を植えられないといって、雪の降る中、雪かきをしてくれました。

OGATSU花物語で感じたこと

いよいよ「OGATSU花物語」ということで、3月4日に花を植え、花の種をまくことになりました。

図4：OGATU花物語

私はボランティアの手を借りて自分だけでするつもりでしたが、プロジェクトの代表の方が「それでは駄目だ。被災した人も動かないとこういうことは続かない」と、私の考えとは別に、絶対に被災者たちにも呼び掛けた方がいいと言ってチラシを作ってくれたのです。私はあぜんとしながら「雄勝は人がいないので、人は来ません」と言いましたが、「いいからやってみろ」と言われました。自分は必死になってやろうと思ったわけではありませんでしたが、外側の人が、こういう運動はこうした方がいいという案を出して支援してくださったので、それに乗って動くことにしました。私はチラシをとにかく仮設の1軒1軒に入れ、そして、新聞にも出してもらいました。すると、3月4日の実施日には100人も集まったのです。

その写真が3月4日の様子です。参加者はもともと雄勝に住んでいた年配のおばさんたちです

図5：苗を植える地元の人々

が、この方たちがとても楽しそうにやってくれました。そのときは支援をとてもたくさん受けましたし、物ももらいました。しかし、支援を受けているだけではなかなか力になりません。支援を受けて、自分から何かをするときに初めて、とても楽しくなるのです。当日はプロの方が、ここはこのようなエリアで、このような花を植えると先に指示を出しましたが、おばちゃんたちは話を聞いていません。「おらんち、これやっから」と言って、ここは赤にしなさい、ここは青にしなさいと仕切るのです。それが非常に楽しそうでした。それを見て、自分が町をつくる側に回ると楽しいということをあらためて感じました。おばちゃんたちにとっては、つくるというよりも私がやることの手伝いであって、それがうれしいのでしょう。誰かを手伝うという、ここ1年間やっていなかったことをできることがとてもうれしそうでした。

私が開いていた学習塾の卒業生で、高校生になった子どもたちも駆けつけてくれて、震災後初めて会いましたが、ごちゃごちゃした中、楽しそうにやってくれました。それは本当に私が予想していた以上の活動で、本当に楽しいことをすることができました。

付け足しですが、その日、炊き出しを100食、有名なカツサンドを用意すると言われたのです。100人も来ないからやめてくれと言いましたが、「いやいや、いいからいいから」と言われてやってみると、その100食のカツサンドも何とかさばけました。それをみんなで食べて、楽しく活動することができました。

4月には、10月に富山大学の紹介で購入したチューリップを、千葉大学の学生ボランティアが植え、ここ雄勝で花を咲かせました。本当にきれいなチューリップでした。周りはがれきしかないので、雄勝で仕事をなさっている方がそれを山から見ながら、チューリップがつぼみからだんだん咲いてくるのを楽しみにしてくださっていました。「だんだん咲いてきたね」「がれきだけだと味気ないからね」「ちょっと色っけ（彩り）があるといいよね」と言って、これを見ながら通っていました。本当にこのチューリップはありがたかったです。

図6：砺波のチューリップ

その後、チューリップが終わってからも、3月4日にまいた種がだんだん芽を出してきました。5月の連休には、今度はピースボートというボランティアが来て、除草作業と肥料まきをしてくれました。そして6月、つい最近ですが、千葉大の園芸学科がもう一度来て、残っている所に種をまいたり、苗を植えたりしてくれました。そして、かつてはがれきでいっぱいだった所、そして、昨年7月にはがれきの中にヒマワリがちょっと咲いているくらいだった所が、今は区切った花壇ができて、ポピーが満開になっています。

OGATSU花物語が果たす役割

OGATSU花物語はこれからも続いていきますが、自分でやってみて思ったことがあります。一

つは、私は震災後３日目に雄勝の町を出てしまい、母のことも探さずじまいだったので、町を見捨ててしまったという感がずっと自分の中にありました。しかし、雄勝に行くたびに、誰もいない所にも土地があり、空があり、山があるのを見て、自分と、それからいったん町を出た人とがつながっていることを確かめる場所にしたいと思い始めました。町とつながるということは、外に出ていったん切れてしまった人とつながることであり、亡くなった方ともつながることではないかと思います。助けきれなかった母や親戚、それから、ずっとあの町を支えてきた人たちとつながることではないかと分析しました。

もう一つ、私たちは当たり前になっていますが、被災した地域には本当に何もないのです。テレビや写真では大体一方向からだけ写していますが、見渡す限り、360 度何もありません。具体的に言うと、普通、お墓参りに来た後は、みんな親戚の家の仏壇でもう一度手を合わせて、世間話をしてという流れになりますが、雄勝にはお墓以外に立ち寄る所がどこにもないのです。ですから、この場所が、雄勝に来た人がちょっと昔を思い出す場所、それから出会った人と立ち止まって話せる場所になっていればと思います。

今、支援がだんだん下火になっています。以前はボランティアさんたちがたくさんいましたが、ボランティアの数が少なくなってきているという話を聞きます。ピースボートや千葉大の人たちがボランティアで私の提供した土地に花を植えていると、私が一人で毎日草取りしているときにはそんなに人が寄らないのに、不思議とボランティアさんが来るとみんな立ち止まるのです。ですから、それを何回か目にしたときに、ボランティアの人たちがここでつながっている、雄勝を見捨てていないということを雄勝の人たちも確認できる場所でありたい。だんだん人が少なくなっていくと、自分たちは見捨てられるのではないかと不安になることはあります。そこでボランティアの人たちがこうして活動することで、彼らが雄勝を見ているということや、町外の人ともつながっていることをもう一度確認できる場所になるかと思っています。

写真の左隅の所を空けてありますが、そこに来週か再来週、町外に出ている雄勝小学校の子どもたちがヒマワリを植えに来てくれることになっています。ここは、被災して町を出てしまった人や、雄勝に残っている人たちの心が癒されると言ってくれている場ですが、今度ここに小学生がヒマワリを植えてくれたら、癒されるだけでなく力づけられる場所にもなっていくのではないかと思っています。

震災から１年３カ月が過ぎて

これが１年３カ月間、私が被災地で何とかやってきたことです。何とかやってきたから前向きかというと、先ほども言いましたが、前向きになったときに後ろを切ってしまうことへの葛藤があって、活動しながらつらくも思います。ただ、つらいけれども私はやってこられたし、多分これからもやっていけると思います。それはなぜかというと、震災を受けたことを自分なりのペースで受け止めて、自分なりにやっていこうという切り口のようなものを試してみたら、うまく通り抜けられる気がしたからです。ここは今向き合ったらつらいから、少し忘れておこうとか、ここはこうしてみようというようなコツみたいなものがつかめたので、そのスキルでこれからもやっていけるのではないかと思っています。

それからもう一つ、その日の午前中は前向きになれても、午後になると気持ちが落ち込むということを１年間繰り返してきました。しかし、ちょうど１年過ぎようとしている３月９日に思ったのですが、これは一生ものなのです。あの３月 11 日のことを経験した者に、このことは一生付いてくる。何をやってもあの日から始まるので、それによって気持ちが上がったり下がったりすることは受け止めて暮らしていかなければいけないという一つの覚悟が決まりました。ですから今回も、こうやって話せば、話した後にその内容について、

また、人前で涙を流してしまったことで落ち込むことを覚悟の上で、これは避けるわけにいかないと思っています。3月11日を自分は経験してしまっているので、それを引き受けていこうという覚悟が決まったこと、その覚悟を決めた上で、自分は雄勝という町の復興に携わっていく、雄勝とのつながりは絶対切らずにやっていこうということ、この三つが固められたかと思います。ですから、これからもやっていけるのではないかと今は思っています。

私の経験がどれほど役に立つかという心配はありますが、ダメージを受けたときに、それに対する向き合い方は、私も含めてみんなそれぞれだと思います。それを同じペースで「被災者の皆さまは」とか「前を向きましょう」という言葉で区切られると、とてもつらいのです。一人ずつが違うことを自覚して、そして、どうするかを自分が決めなければいけないと思います。私は、この思いを引き受けたまま一生生きていくと覚悟を決めたとき、楽になりました。ですから、一人一人が向き合って、一人一人が自分の気持ちでどう生きていくか覚悟を決める。それは、今は前向きにならないという覚悟でもいいと思います。みんなが楽しそうにしているけれども、今、自分は落ち込んでいるから楽しめない、それもよしにしてほしいのです。そのようにしてやっていきたいと思います。

そのためには、もう少し気持ちが楽な人たち、つまり被災していない人たちが、「そういう向き合い方でもいいよ。できないところはサポートするよ」というように、その時間を保証してくださると、自分と向き合って、自分で覚悟を決めることができていくのではないかと、私自身の経験から思っております。

私自身、これから町の再建にはいろいろ大変なことがありますが、そのやり方でやっていこうと思っています。私は学習支援という形でずっと子どもたちとかかわっている中で、向き合うことで助けられたので、子どもにも向き合うということをいろいろな形で経験させることができたらと思っています。

東日本大震災～大川小学校70名の命

佐藤かつら（元中学校教員）

The Great East Japan Earthquake: 70 lives lost in Okawa Elementary School

Kathura Satou (Former junior high school teacher)

皆さま、初めまして。宮城県石巻市の佐藤かつらと申します。この震災において、石巻市は最大の被災地といわれており、一番復興が遅れている所ではないかと思います。全国各地の方々からはたくさんの支援、励ましをいただきました。この場をお借りして、心から感謝を申し上げたいと思います。

私は石巻市の公立中学校の教員をさせていただいていましたが、教員でありながら親でもあることはもう変えられないので、こういう思いをして教員を続けていくことができなくなりました。何をしようという思いや自分の中での計画は全然なかったのですが、とにかく今まで娘のそばにいられなかった分、娘のそばにいようかなという気持ちで退職しました。今回、このようなお話をいただいて、自分が亡くなった子どもたちのためにできることの一つかなと思い、今日は来させていただきました。

娘を失った日

今日は娘の写真を持ってきました。一人で来るのは何か心細かったので、応援してくれるかなと思いまして。娘は6年生でした。みずほといいます。姉が書いたエッセーにもあったのですが、二つ上の姉のまねを一生懸命して、お姉ちゃんのやることに憧れて、いつもいつも姉を手本にしていました。とても仲の良い姉妹でした。

あと1週間で卒業式でした。私も中学校の教員をしていたので、毎朝ばたばたと出ていって、帰りも本当に遅い日が多く、ろくに話も聞いてやれなかったことを、今、非常に悔やんでいます。お母さんには期待できないと自然に思ったのでしょ

うか、本当にわがままを言わない子で、いつも小さい子の面倒を見ながら、小さい子たちに振り回されているような優しい子でした。私がいない分、うちのおばあさんのそばにいつもいて、進んでおばあさんのお手伝いをしていました。編み物などをおばあさんからたくさん教えてもらって、一緒にやっている、お料理なども好きでお手伝いをしている、そういう子でした。姉はよく「買い物に行こう」とせがむのですが、妹は姉の買い物に付き合って、一緒に来るのですが全く物を欲しがらない。「何か買ってあげるよ」と言っても「何も要らない」と言い、お姉ちゃんのお下がりを喜んで着ている本当に優しい子でした。もっともっと話を聞いて、もっともっと一緒にいる時間をつくってあげたかったと思ったときには、もういない。まさかこういうことが起きるとは思っていませんでした。

震災が起こったのは、3月11日の午後2時46分です。そのとき私は自分の職場の中学校にいました。その日、中学校は卒業式で、お昼過ぎには子どもたちは既に下校していました。すごい揺れでした。昭和53年の宮城県沖地震も体験しましたが、あんなものではない。本当に長く、強く、もう立っていられない。私たち職員もすぐに校庭に出ましたが、もう立っていられない。それが本当に長く続いて、すぐにテレビをつけたらテレビのアナウンサーが「大津波が来ます」と叫んでいました。テレビのアナウンサーがこんなに取り乱してしゃべるのかなというくらいの勢いでした。すぐにテレビの電源は切れました。その後はラジオをつけていたのですが、ラジオのアナウンサーもずっと「大津波が来ます」と叫んでいたことを本当に覚えています。それが6m、7mというように、だんだん上がっていくのです。

私の家は、大川小学校のある北上川よりも5kmぐらい上流にあります。ただ、わが家は川の近くにあったので、先ほどの揺れとラジオの報道を聞いて、自宅は絶対に津波でやられると思いました。自宅にいる長男の携帯にすぐに電話をしたらつながったので、「とにかくうちにいる家族を頼むよ。みずほはどこにいる？」と聞くと、「小学校にいて、まだ帰ってこない。みずほだけがまだ帰ってこない」と言ったのです。ただ、まだスクールバスに乗る時間ではないので、「ああ、まだ学校にいる時間だ。先生たちと一緒だ。ああ、よかった。先生たちと一緒なら守ってもらえる」と思いました。学校は必ず守る。それは教員の使命だと思っています。親が迎えに来ないなら、その迎えが来るまで、親に確実に引き渡すまでは学校が絶対に守るのだ。それは揺るぎないものとして教員の中にあると思っています。ですから、「ああ、よかった」と思った時点で、みずほへの心配は私の中からすっかりなくなってしまったのです。

その日、わが中学校も避難所になったのですが、「あなたの家は川沿いだから、とにかく帰りなさい」と校長先生が言ってくださいました。普段であれば30分で着く道のりが、2時間もかかりました。途中、通行止めになっていたのですが、とにかく家まで行きたいと思い、警察の通行止めを振り払って、その川沿いを自宅まで走ったのです。ものすごく真っ暗で、川の水面は見えなかったのですが、自分のすぐそばまで黒い波が盛り上がってごうごうと音を立てていることが分かったのです。もう恐ろしくて恐ろしくて、でも、とにかくうちの地区までは水が来ていない、大丈夫だという話を聞いたので、どうにかこうにか、脇目もふらず、その黒い波のごうごうと鳴る中を帰っていったことを覚えています。

わが家は、本当に目の前まで水が来たのですが、どうにか水が入らずに済みました。地域に戻ると、「大川小学校に行くまでの堤防が決壊したので、バスは戻って来られない。車が通れない。だから明日、必ずヘリコプターで救出されるから」ということでした。私たち小学生の親は、「そうだね。明日、必ず帰ってくる。今日は先生たちと一緒だ」といって、みんな特に心配することなく、その日は停電した家で、家族と肩を寄せ合って休みました。

次の日、救出されるという話だったのですが、現地に行った方から「大川小学校はもう壊滅だ。大川小学校どころか、小学校のあった釜谷地区がもう壊滅して、家も何も残っていない。鉄筋の建物しか残っていない」と聞きました。耳を疑いました。どこかで子どもたちは生きている、そんな簡単には死なない、絶対にどこかで生きていると、とにかく祈ることしかできませんでした。しかし、自分の足で、その次の日にやっと船で渡してもらって大川小学校に行くと、信じられない光景が広がっていたのです。

チューリップが咲いている三角地帯の脇に、ブルーシートをかけられて、小さな遺体がたくさん並んでいました。消防団も、自衛隊も、警察も来ない。地域の消防団のお父さんたちが大川小学校に入りました。消防団のメンバーには、自分の子どもを捜している人もいるわけです。その地獄絵図のような中を、みんなで泥をかき分けて、自分の子どもや隣近所の子どもを必死に捜しました。もう現実とは思えなかったです。「みずほちゃんが揚がったよ」と聞かされて、それだけでも信じられなかったのですが、娘の遺体と対面したときのことは忘れられません。先に見つけてくれた同級生の保護者の方が、泥をできるだけ取ってくれていました。それでも細かい砂や泥が取れなくて、目や鼻や耳に入り込んだ泥を、とにかく「ごめんね、ごめんね」と言いながら拭いてやることしかできませんでした。

14日の朝に土手で対面することができたのですが、主人と一生懸命に娘の顔の泥を拭いていたら、娘の右目から涙がスーッと流れたのです。ああ、私たちを待っていたのだ。本当に、本当にごめん。三日もこんな寒い所で、水の中に、こんな土手の上に並ばせられて待っていたと思うと、本当にかわいそうでした。小学校の1年生から6年生まで、砂をぎっちりとつかんで、叫び声を上げた形相のまま体が硬直して動かない遺体や、津波に上半身の衣類を取られて、裸の状態で天をつかむような格好で並んでいる遺体。子どもたちが毎日楽しく学んでいた小学校だったはずなのに、何でこんな目に遭わなければいけないのだろうと思いました。

説明会で爆発した怒り―なぜ、大川小学校だけがこんな目に

その後、私たち遺族は1カ月近く放置されていました。私たち夫婦はどちらも教員ですが、義務教育の学校管理下でこんな大惨事が起こったのです。例えば避けられない理由があったとしても、義務教育の学校管理下での大惨事が想定外だったとしても、一人でも死んだら、やはり学校や教育委員会は保護者に対して緊急説明会を開く体制をつくらなければなりません。それは常識だと思っていました。ところが、一向にその連絡が来ないのです。通信が途絶えたところもあったので、準備に時間がかかっているのだろうと思っていましたが、ちっとも音沙汰がありません。しかも、校長先生は先に、生き残った子どもたちを集めて登校式を行っていました。びっくりしました。信じられなかったです。亡くなった子どもたちに対しての謝罪や、私たちに対して理由の説明をする会は持たないのに、生き残った子どもたちの登校式を行ったという報道を見たときには、ものすごい怒りがわき上がってきてしまいました。こんなことがあっていいのか。この子たちは一体何だったのか。死んだら終わりでそのままなのかと。

保護者の訴えで、ようやく1回目の説明会が開かれましたが、それは4月9日でした。そのような状態で開かれた説明会だったので、遺族はみんな怒りが頂点に達していて、怒りが爆発してしまったのです。教育委員会も学校も、この大川小学校の大惨事について、私たちに何も説明することはできませんでした。これからどうするかということを、準備してお話をしてくださることもなかったのです。大川小学校の時計は3時37分で止まっていたので、地震が起きてから津波が来るまでの51分間をつぶさに調査して説明してほしいと、2回目の説明会を要望しました。

ただ、2回目の説明会は、1回目の説明会では

本当に遺族の叫びが飛び交ったので、私たちをクレーマーと勘違いしたのでしょうか、そういう対応をされたのです。冒頭は「今日の説明会は１時間で終わらせていただきます」というくだりから入りました。もう耳を疑いました。石巻市長にも来ていただきました。彼の「『宿命』発言」というものが世の中に出回りましたが、それよりも私がもっと耳を疑ったのは、「石巻市としては、学校の建物は市の責任ですが、教育の中身は市の責任ではありません」と言い放ったことです。びっくりしました。石巻市立の学校ではないのかと。その説明会でも遺族の質問が出ましたが、言葉に詰まるとだんまりを決め込んでしまう、そういうやりとりでした。そして、「もう１時間半を過ぎたので、今日はこの辺でもう終わりにさせていただきます」と司会が言ったのです。もう遺族は信じられなくて、ただ、遺族も毎日の捜索生活で疲れ切っている方が多かったので、あのときは本当にそのやり方に打ちのめされてしまったという感じでした。

そして「今日の説明会はやめさせていただきます」と、前に並んでいる市長をはじめ教育委員会の方々全員が立ち上がったのです。遺族が「もう説明会はやらないのですか」と聞くと、「もう説明会はやりません」と言われました。「私たちは何も納得していない」と叫んだのに、それを振り切って全員が退席されました。そのときは教育委員会が報道をシャットアウトなさったのです。全く密室の中で行われた説明会でした。その後、教育委員会は建物の外で詰めかけていた報道陣から取材を受けていましたが、テレビに映った様子や報道の方に聞いた話によると、「誠心誠意説明したので､遺族の方たちには分かってもらいました」というようなコメントを出されていました。あのときは本当につらかったです。

先ほども言いましたが、家も何も流されてしまった、小学生の子どもはもちろん、家にいた家族もみんな失った、自分の住んでいた地域も水没してしまって戻る所がないという方たちが、大川小学校の子どもたちの遺族の半分以上いるのです。生活もぼろぼろの状態なのに、説明会ではそういう対応をされて、本当に精神的に打ちのめされてしまいました。あんな言い訳を聞くのなら二度とあの人たちの話は聞きたくない、どうせ子どもは戻ってこないと言って、検証を訴えることを諦めてしまい、自分の気持ちに蓋をしようとしている遺族が半分以上いるのです。

でも、忘れようと思っても忘れられないのです。なぜ子どもがこんな状態で死ななければいけなかったのかと、毎日毎日、繰り返し自分の心の中によみがえってきます。

津波が地震の 10 分後や 15 分後に来てしまったのであれば、先生たちは大勢の子どもたちを避難させきれなかったでしょうから、それはもう諦めます。そして、近隣の学校がどこもやられた、多くの学校がやられてしまったのであれば、その中の一つですから、それも諦めます。マニュアルの不備な学校は他に幾つもありましたが、そのときの先生たちの判断でやられてしまったのは、どこを聞いても大川小学校だけなのです。地域住民の方たちとタイアップして、本当に子どもたちの命を守ることだけを全うして、子どもたちの命を助けた学校がほとんどです。

新聞の報道には、学校管理下で亡くなった子どもたちは被災３県で何人などと、よく出ます。しかし、その学校管理下という押さえは非常に範囲が広く、例えば下校途中でまだ家に帰り着いていなかったり、帰り着いているかどうかの確認が取れていない子どもも学校管理下の死亡というくくりに入るのです。早退した子どもでも、親が死んでしまって確認していなければ、その子も学校管理下の死亡という範疇に入ってしまうのです。そういう広い意味での学校管理下ではなく、被災３県で、先生たちとともに学校にいて命を落とした子どもは、本当は 75 人です。１人は南三陸町の中学校の男子生徒だそうです。その子は先生たちと一緒にみんなで津波に追い掛けられる中、たった一人だけが転んで津波に巻き込まれてしまったという話を聞いています。情報も時間もありながら、遺族の叫びもありながら、子どもたちの「先

生、山に上がろう」という声もありながら、それでも津波にのまれるまで1mも高い所に上げてもらえなかったのは、この大川小学校だけなのです。なぜだろうという疑問の気持ちは、私たち親から離れることはありません。

子どもたちの声が聞こえなかったのか

私は、石巻市立の中学校で担当している子どもたちを卒業させることだけを目標に、毎日毎日、とにかく学校に行っていました。ただ、私たちの気持ちの傷を深くしてしまった6月の2回目の説明会で、あまりにもひどいやり方をされた後、教育委員会の先生方が授業研究会の助言者としてうちの学校に来て、とても立派な指導助言をなさっている姿を見たりすると本当につらくて、もう駄目になりそうになりました。しかし、家族に支えられて、気持ちを同じくする遺族の人たちと支え合ってここまで来たという感じです。

地震が起こった後、子どもたちはただ校庭に並ばせられていたのではなく、「先生、山に上がろう」「俺たち、いつもあの山に上がっているから」と叫んでいたそうです。ヒマワリが咲いていた所から下がっていくと大川小学校があります。一番手前にある山はコンクリートで周りを固められていて、とても急な所です。「こんな山では登れないよね」と、大川小学校に手を合わせに来ていただく方たちは、ぱっと見た印象で思われるようです。もちろんそこは子どもが登れない山で、普段もそこには登っていません。普段から登っている山は、校舎の脇に体育館があって、その奥にあるスギ山なのです。手前側から見るとかなり奥の方にあるスギ山ですが、そこでは過去に総合学習でシイタケ栽培などをしていて、子どもたちは普段から頻繁に上がっているような、本当に慣れ親しんでいる山でした。

地震が起きてから津波が来るまで、何本も倒木があったので山は選択できなかったということを、一人助かった先生が言っていたと教育委員会は説明されましたが、震災の後、どう見ても山の木は一本も倒れていないのです。自衛隊や警察が、遺体や不明者の捜索に山に上がってみた感想で「山はしっかりしている、一つも崩れたところはない、倒木は一本もありません」と証明してくださいました。その後の説明会では、「倒木は一本もありませんでした」と教育委員会も認めざるを得ませんでした。では、倒木は一本もないのに、なぜ山に上がらなかったのだろう、その50分間、先生たちの間で何が話し合われたのだろう、それも大きな疑問です。

教育委員会は「『山に上がろう』と危機感を訴える子どもたちの声は、生き残った子どもたちの聞き取り調査の中では確認しておりません」と私たちに言いました。とにかく訴えて開いていただいた今年の1月と3月の説明会で、教育委員会はそのように説明なさいました。でも、娘の同級生は「聞き取り調査でちゃんと言ったよ。○○君も、○○君もみんな、『俺たちここにいたら死んじゃう』『先生、津波が来るから山に上がろう』と言ったよ」と。複数の子が教育委員会の聞き取り調査で言っていることは、間違いないと思います。しかし、それを「確認していない」ということにして、教育委員会は説明するのです。子どもたちの言葉を意図的にかき消しているのではないかと思われて仕方がありません。

娘の同級生の保護者の方で、息子さんがそういうふうに先生に泣きながら訴えていたということを助かった同級生から聞いたお母さんは、「息子の最期の言葉を聞いた以上、『想定外だったから仕方ありませんでした』では済まされない」とおっしゃっています。息子の、生きたい、山に上がって助かりたいという思いを知った以上、子どもたちの訴えを親として訴え続けていくそうです。きちっと事実をすべて、いいことも悪いことも出して、その50分間を検証してもらいたい。大川小学校のような惨事が2度と起こらないように、とにかく検証していただきたい。私たちの願いはそれだけなのです。

ただ、一緒に亡くなった先生方の遺族に申し訳ないとか、「ここは大丈夫だから」と言った地域

住民の遺族の方の心をかき乱すのではないかという懸念の声が聞かれます。つらい思いをする人もたくさんいるから、検証をわざわざ進めなくてもいいのではないかと言う人もいますが、74 人の子どもの命を犠牲にしたという揺るぎない事実の前に、今生きている大人の都合でこの検証を諦めてはいけないと私は思っています。このままでは、本当にうやむやにされてしまう。74 人の子どもたち、それから 10 人の亡くなった先生方も、いろいろな未来への希望があったし、もっともっと生きたかったでしょう。うちの娘は英語が好きで、通訳になりたいとずっと言ってました。一人一人にそういう思いがあって、学校生活を送っていました。それを思うと、本当にもう・・・。

犠牲になった子どもたちは帰ってきません。それなら、74 人の命を最大限に輝かせる方法はないか。今後、隠していることもすべて出していただいて、この子たちが亡くなった原因をしっかりと検証していただきたいのです。そして、それを今現在の学校教育現場にきちんと生かしていただきたい。これから、日本全国どこで災害が起こるか分かりません。それをしっかり生かしていただくことが、子どもたちや先生方の命を生かすこと、最大限に輝かせることにつながると思います。とにかく、この 74 人の子どもたちと 10 人の先生方の命を無駄にしたくないのです。このまま「大災害でかわいそうだったね」「残念でした」という話では終わらないと思っています。

釜谷地域の方も、みんながみんな大丈夫だと言ったわけではありません。区長をはじめ、バスの運転手さんは「子どもたちを何人でも乗せて、雄勝峠に逃げてくれ」と言っていました。みんながみんな安心して構えていたわけではなく、車で山や峠に逃げて助かった住民は何人もいます。しかし、釜谷の住民がそう言っていたということを理由の一つにしようとする動きも見えます。でも、私たち保護者は、釜谷の住民の方に子どもを預けたわけではないですよね。教員として、いろいろな情報を聞いた上で、地域の方の声も聞いた上で、今、最悪のことが起きても子どもを守れるようにするにはどうしたらいいかということを考えて動く。大げさなくらいの避難をする。それがなされなかったのはなぜか。教員であれば、本当に大げさなくらいの動きをして当たり前だと、私は教員の感覚として持っています。でも、先生方は先生方で、恐らく子どもたちのために一生懸命やってくださったのだと信じたいです。それでもこういう大惨事となり、犠牲が出てしまったのです。

避難訓練の真実

事前の訓練もほとんどなされていなかったことや、避難マニュアルが十分でなかったことが、情報開示でいろいろと分かってきました。宮城県で実際に学校現場での研修会などの動きが始まったのは平成 18 年度ぐらいからだと思いますが、99％の高い確率で必ずまた宮城県沖地震のような大災害が来るということは、ずっといわれ続けていました。そういう状況の中で、とにかく子どもたちを守る体制をつくるということで、再三にわたって研修会が開かれてきました。県や市が主催し、学校の担当者や教頭・教務主任クラスが常に集められての緊急性を伴った研修会だったと聞いています。そういうことが繰り返されて、震災が起こる 2 年前の平成 21 年 1 月、ほかの学校ではなく、自分の学校環境を踏まえた自校マニュアルをしっかり整備すること、災害時でも保護者ときちんと連絡が取れるような連絡体制を確立すること、また、緊急時でも子どもたちを守れるように訓練を充実させることが言われていました。

大川小学校では行われていなかった訓練ですが、周りの小学校では、研修会を踏まえて引き渡し訓練が盛んに行われていたのです。子どもたちがパニック状態になったとき、親の顔を見つけて親に飛びついて、そのまま連れて帰られてしまうと、学校では確認できないわけです。従って、きちんと親にも参加してもらい、事前にいろいろなルールを取り決めて、それを踏まえて時間的なロスなくみんなで整然と動き、低学年から高学年まで、迎えに来た親にきちんと引き渡すという訓練

が、意識の高い学校では年に２～３回行われていたと聞いています。私も「何で大川小学校では引き渡し訓練の連絡が来ないのかな」と思ったこともありましたが、それを担任の先生に結局一回も言わなかったことは、親として本当に悔やまれるところです。ただ、引き渡し訓練が小学校の間で当たり前となっている中で、大川小学校では一回も行われていなかったことは事実です。教育委員会が「先生たちは迎えに来た親の引き渡し対応に追われて、避難場所を決められなかった」という説明をしたことも一回ありますが、それは大災害の上では十分予想できることです。だから引き渡し訓練を各小学校ではやってきたわけで、それは理由にも何にもならない。再三にわたって緊急時に対応する対策を整えておくように言われながら、大川小学校は本当にその危機感の意識が薄かったのです。

校長先生は災害当日に休みを取っていらして被害に遭わなかったのですが、なかなか現場に現れようとはしませんでした。大川小学校が大変なことになっているという状況でも、親に指摘されてやっといらしたのが震災後６日後だったのです。それも、自分の手を使って子どもを捜そうとする動きはなかったと聞いています。持っていたカメラで被災状況を撮影して終わりだったと。とにかく、大災害が起きると言われている中で、ほかの学校が当たり前に進めていることを大川小学校ではやっていなかったことが分かって、これは学校管理の最高責任者である校長先生の大きな過失ではないかと思いました。そのことを説明会で追及したら、「それは私の責任です。申し訳ありませんでした」と、一応言葉では謝りました。しかし、それを受けて教育長は「人災の面もあった」という言葉を残しています。そうは言いながらも、では、どう責任を取られるのかというと、誰も責任を取っていません。誰もきちんと謝ってくれません。しかも、今年３月まで大川小学校の担当者で、子どもたちのいろいろな証言メモを廃棄した指導主事の方たちは、教育委員会での務めを終えて、何の責任も問われず校長先生に昇任なさっています。きっと民間だったらこんなことはあり得ないのではないかということが、石巻ではたくさんあります。それをこの１年３カ月間、ずっと見てきました。

遺族として諦めない

母親は10カ月間、子どもをおなかの中で育て、動いては喜んだり、産まれるときにはいろいろな痛みを伴ったりして、出産という感動を味わいます。その自分の産んだ子が、「災害で、津波に巻き込まれて死にました」と、棺桶に入れられて帰ってきたのです。なぜ死んだのかという疑問は消えませんが、説明もしてもらえません。生まれたときにいろいろな喜びやつらさを共有した子どもが、どんないきさつで、何が原因で死んでしまったのかという事実一つ一つを、親として知りたい。もう諦めてしまっている遺族が増えていく中で、そのときの現場の状況や、子どもたちがどこで、どんな状態で、何が原因かを知った上で、津波に対する恐怖感の中で死んでいった子どもの思いを、どんなにつらくても親として知ってあげたいと思います。そうでないと本当に諦めきれないし、忘れることなどできません。今、私たちが大川小学校の子どもたちの遺族として理不尽な思いをしていることを、多くの方に知っていただきたい。そして、何かの形で協力していただけたら、本当にありがたいと思います。ありがとうございました。

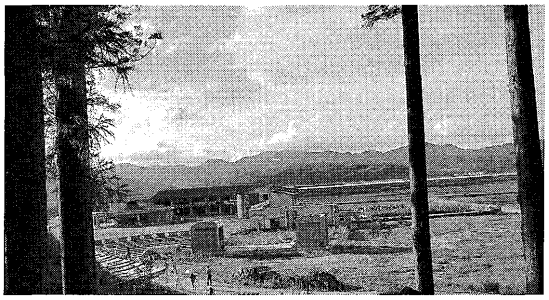

図７：大川小学校校舎跡